九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

憲法とキリスト教 ： 第4回 人権思想と聖書

南野, 森
九州大学大学院法学研究院 ： 教授

森島, 豊
青山学院大学 ： 教授

久保, 文彦
上智大学基盤教育センター ： 講師

https://hdl.handle.net/2324/7177155

出版情報：福音宣教. 77 (4), pp.2-8, 2023-04-01. Oriens Institute for Religious
バージョン：
権利関係：

巻頭特別企画

憲法とキリスト教

第4回　人権思想と聖書

南野　森

みなみの・しげる●1970年京都府生まれ。九州大学法学部教授。著書に『憲法主義』、『憲法学の世界』等。本誌に「京・江戸・博多、そして巴里」を連載中。

森島　豊

もりしま・ゆたか●1976年神奈川県生まれ。青山学院大学教授・宗教主任。涙骨賞最優秀賞。『抵抗権と人権の思想史』（教文館、2020年）で青山学院学術賞。

久保文彦

くぼ・ふみひこ●1965年長野県生まれ。上智大学・基盤教育センター講師。聖書学・キリスト教人間学を専攻。カトリック東京教区信徒、『福音宣教』編集企画委員。

現代的な問題に聖書がどう応えるか

森島　聖書の中には久保先生がおっしゃるように、人権思想に重なるような素晴らしい話がたくさんあります。しかし現代の人権という文化価値を基準にするとズレを感じる物語もあると思います。

もちろん、聖書そのものは人権のために書かれたものではありません。イエス・キリストは罪人や社会から疎外されていた人のところへご自分から行かれ、その一人ひとりを愛し、人の尊厳を非常に重んじておられますが、イエス・キリストのメインの働きは人権活動家ということではありませんでした。このあたりの聖書のメッセージと社会の問題の解決という関係をどう受け止めたらいいのかということが、今、私たちの世代にとっても考えさせられる所ではないかと思います。

久保先生がおっしゃられたように、聖書も主イエス・キリストも「神を神とする」ということを、神の言葉として私たちにお伝えになりながら実践され、重んじておられました。しかし、聖書が語っていることと「人間の尊厳」が重んじられるということが、キリスト教会の中で、あるいは現代社会の中で、あまりマッチしていないということがあるのではないかと思います。久保先生はそこがちゃんとマッチしていると説明されていたと思うのですが、この辺りを、歴史学的にも、聖書学的にも、また教会的にもしっかりと説明する必要があると思うのです。読者の方々でも今日の人権意識から考えて疑問に思うトピックがいくつかあると思います。

その一つとして、「聖書は時代の産物である」ということから生まれる疑問があります。たとえば奴隷という存在がいることが聖書の中に書かれています。これをどう扱うか。

また現代において、人の生きる権利の問題として、LGBTQの方々のことなど、法制化していないいろいろな人権問題が表面化しました。それら現代的な問題に対して聖書がどう応えられるかということ、聖書がそれらの問題に関して乗り越えられない壁になってしまっていないか、という問いも出てくると思います。カトリック教会にとってはまさに大きな信仰の問題になるのではないかと思います。

聖書に出てくる奴隷を「どう受け止めたらいいのでしょうか」と質問が出た時に、久保先生はどうお答えになりますか。

聖書における奴隷に関する規定

久保　旧約聖書の背景である古代イスラエル社会には、他の社会と同じく奴隷がいました。特に、債務を抱えた貧しい人は奴隷の身分に落ちることがよくあったのです。旧約聖書の複数の箇所に、そのような奴隷の扱いに関する規定が記されています。代表的な規定は、出エジプト記21章1－11節、申命記15章12－18節、レビ記25章35－55節です。それぞれの規定は、異なる時代状況の下で記されたと考えられます。

より古い時代に記された規定は、七年目に自由人の身分に復帰する権利を奴隷に認めています（出エジプト21・2、申命記15・12）。奴隷はすぐに解放されねばならないとは書かれていません。その意味で、これらの規定を記した人々が奴隷制を容認していることは確かでしょう。

ただし、これらの規定を記した人々は、奴隷制を無条件に良い制度と認めたり、変えようのない現実と見たりしてはいません。奴隷労働の期間を六年に限り、七年目に奴隷身分から解放される権利を認めるという

規定には、生涯を奴隷として生きることは人間の自由な本性に反するという考えが籠められているからです。

より新しい時代の規定は、貧しい同胞を奴隷ではなく雇い人として扱うべきであると書いています（レビ25・39以下）。このテキストは「ヨベルの年」という社会復興のプログラムに関連しており、滅亡したイスラエルの復興を意図した人々によって記されました。そこでは、将来のイスラエル社会に奴隷扱いされる同胞がいてはならないという理想が語られています。

この理想は、イスラエルの神が奴隷を解放する神であるという理解と切り離せません。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」（出エジプト20・2、申命記5・6）と語りかける神は、例えば、古代メソポタミアの神話に登場する神とは違います。メソポタミアの神話によると、神々の世界には身分の序列があります。上級の神々が人間を造るのですが、それは下級の神々が放棄した辛い奴隷労働を人間に担わせるためでした（「アトラ・ハシース物語」『古代オリエント集』筑摩書房に所収）。

こうした神観の違いは、人間観と社会観の違いに対応しています。旧約聖書を編集した人々は、社会の中に奴隷の身分に縛り付けられた人間がいるという現実を、人間が甘受すべき宿命とは考えませんでした。そもそも、イスラエルの歴史の原点には、エジプト脱出という奴隷解放の出来事が据えられています。奴隷として生きることが人間の生来の自由に反しているという洞察が、聖書の基本にある人間理解です。

総体として、良い方向へのゆっくりとした動き

久保　社会が良い方向に変わっていくには、時間が必要です。数十世代にわたる時間が必要な場合もあるでしょう。聖書には奴隷解放の規定が記されているのですが、そのことを知っているはずのキリスト教会が奴隷制を容認していた時代もあります。レビ記25章の奴隷に関する規定は、イスラエルの同胞の奴隷扱いを禁じる一方で、イスラエル社会の外部にいる人々を奴隷にすることを認めています（レビ25・44以下）。このようなテキストを元に、キリスト教徒が自分たちのコミュニティの外部にいる人は奴隷扱いしてもかまわないと考え、外国人を奴隷化した時代がありました。アメリカ大陸に渡ったキリスト教徒がアフリカから奴隷を連れて来たり、アパルトヘイトのようなことが起きたりしたのです。

どのような人間も奴隷扱いされてはならないとは書かれていない点で、旧約聖書の奴隷に関する規定は、人権の普遍性を重んじる現代人の考え方からすると、時代の限界を抱えています。ただし、奴隷のいない社会に向けて、現状を少しずつ改革していこうという意志が、これらの規定には表現されています。そこは見落とせない重要な点です。社会を変革するに当たっては、人間が世代を超えてつながり、変革の努力を諦めることなく、積み重ねていくことが大切です。変革が急速に進む時代もある一方、変革前の古い時代に逆戻りする時代もあります。変革を進める力とそれに逆らう力がせめぎ合いながら、人間の社会は総体として人権が充実する方向へとゆっくり進んできたのが、歴史の実情ではないでしょうか。

森島　そうですよね。古代の時代背景の中で語られている聖書を字義通り現代に当てはめたり、現代の価値観から聖書を否定するような過激な仕方では、聖書を聖書として読むことができません。むしろ、より良い人間のあり方に活かしていく原動力が聖書の中の福音にあるという久保先生のご理解をとても嬉しく聞きました。

実際に人権の歴史を辿っていくと、キリスト教なくして人権という理解は出てこなかったということを感じます。これについては賛否両論あるかもしれませんが、事実、キリスト教国、あるいはもう少し幅広くキリスト教精神と言ってもいいと思うのですが、そのような文化価値を持った共同体なくしては、人権が法として整備されていくプロセスにならなかったのではないか、ということが感じられます。

神の似姿としての人間

南野　私も、聖書を読んでいますと旧約はもちろん、新約でも、たとえばパウロ書簡などで、現代の価値観からするとどう理解すれば良いのかわからなくなるような記述に出会います。そのような箇所を、現代の聖書学や神学ではどう考えているのか、これはいずれまた機会を改めて久保先生や森島先生にもお伺いしたいところではありますが、その一方で、聖書には、その後の西洋社会の文化や文明、あるいは価値観の根本的なところに影響を与えているであろう部分、しかも、それが現代の人権思想、憲法の考え方につながってい

ると言えそうな部分もまた含まれているようにも思います。そしてそういう、いわば西洋発の、そしてその根源には聖書発の部分も含まれている、そういう社会的・文化的バックグラウンドを背負ったものが、長い時間をかけて我々の住むこの極東まで届いているということになるのではないでしょうか。

聖書もキリスト教も専門的に勉強していない私のような者でも真っ先に思いつくのは、創世記1章26節にある、神は神に「似せて」人を造った、という箇所です。これがキリスト教の人間観の土台にあるのかな、という気がするのですが、そこはいかがでしょうか。

久保　まったくその通りです。人間は「神の像」として造られたと語る創世記の物語は、人間の人格性を考える上で、最も大切なテキストとして読まれてきました。第二バチカン公会議の公文書『現代世界憲章』でも、人格の尊厳について解説する箇所（第一部・第一章）で、人間が「神の像」として造られたという創世記の物語が言及されています。

創造物語が人権につながる

森島　旧約聖書学者の中にも「創造物語」が人権につながる、いわゆる人権宣言のようなものだ、ということを言っている方がいらっしゃいます。どのように理解されているかというと、創造物語では神がお語りになられて、それに応えるように被造物が存在していくのです。

ちょっと話がそれますが、聖書の面白いところは、「夕べがあり、朝があった」（1・23）と、夕べから始まるのです。一日の始まりを暗闇から数えるのです。日本では一日の始まりを朝日から感じ、暗闇に向かっていきます。人間観でも若い日々は光り輝いていて、歳を重ねることが暗く感じられるかもしれません。しかし、聖書は逆なのです。イエス・キリストも夕方になって「向こう岸に渡ろう」（マルコ4・35）と弟子たちに言われました。聖書は「暗闇から光へ」と向かっていく人生観・歴史観なのだと思います。

話を戻しますが、「光あれ」と言って昼と夜を分け、水を上と下に分け、水がひとつのところに集まって乾いたところが現れ、草と実りのある木ができ、海の生き物、空を飛ぶ生き物、家畜から地を這うもの、地の獣、そして人間が男と女に創造されていきます。

そこではすべての存在が存在できる環境が整ってから被造物が置かれていくのです。太陽と月は「光あれ」と言ってできたわけではなくて、上と下ができて、その存在が存在できる場所が確保されてから、四日目に置かれていくわけです。例えば家畜は草と木が生えてから置かれていく。そして置かれてから「良かった」（1・25参照）と言われる。そして最後には「極めて良かった」（1・31）と言われます。「失敗作を造ってしまった、造らなければよかった」とは言ってないのです。生きることを喜ばれる存在として、存在しているのです。つまり私たちがここに存在しているのは、神が存在することを求められたから存在しているということです。人間に被造物を「支配せよ」（1・28）と書いてありますが、自分勝手にやっていい、ということではなく、神様が造られたように治めなさい、ということ、つまりその存在が存在できるように治めなさいという使命が与えられています。

「あなたに居て欲しい」

森島　つまり天地創造は、存在が尊ばれる、神に喜ばれている存在だということを物語っています。これは近代的な文化価値である人権のおおもとにあるような理念や考え方が語られていると受けとめても良いのではないかと思います。

南野　私も、被造物、とりわけ神によって神の似姿として造られた人間が「非常に良かった」（1・31）と評価されている点はとても重要だと思います。人間は、人間を始めとするすべての被造物を良いものとして大切にしなければならないという価値観でしょう。

森島　むしろそれがキリスト教会から、あるいは私たちの教育現場からあまり聞こえてこない、ということの方が問題かもしれません。「あなたは居ていいんだ」「あなたに居て欲しいんだ」と。こういう価値観というのはなかなかこの世では聞こえてこないのですね。「あんたなんか居ない方がいいんだ」などの言葉の方が目立っています。自分でも自分に言ったりします「私なんか、居ない方がいいんじゃないのか」と。

自分の存在を肯定してくれるメッセージはどこからくるのでしょうか。理性から、合理性からくるのでしょうか。そうではなく、歴史の中では聖書からきたのではないでしょうか。こういう聖書のメッセージを語ることが今の時代、求められているのではないかと思います。このことは、人間の尊厳を重んじる日本国憲

法を活かすために、キリスト教的な考え方が広く社会に受容される必要があると言われた久保先生の問題提起につながると感じます。

イエスの活動の根源にある認識

久保　人間の命が祝福されており、根本的に良いものとして全面的に肯定されているという事実に対する認識が、イエスの活動の根源にありますね。「あなたの敵を愛しなさい」と弟子たちを諭したイエスは、その根拠として「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである」と語っています（マタイ5・45）。この発言は、イエス自身がどのように神の働きを理解していたのかを、私たちに教えてくれます。

　人間はしばしば何らかの基準や尺度に基づいて人間を評価し、その存在価値に序列をつけることをします。ところが、イエスが父と呼ぶ神は、そのようなことはしない。人間の存在価値を無差別に肯定し、あらゆる人間の命を祝福する力として、父である神は働いている。その事実を、イエスは太陽が昇って雨が降るという自然の営みの内に見ています。

　これはイエスの活動を支えた、彼の霊性（スピリチュアリティ）の形です。すべての人間の命を祝福する神との関わりに基づいて、イエスはあらゆる人間の尊厳を受け止めていたのではないかと思われます。

神との関わりと、人との関わりは切り離せない

久保　イエスは病人をいたわり、貧しい人々とパンを分かち合い、女性を大切にしました。関わった人間をかけがえのない人として大切にする。イエスの人との関わりは、イエスの神との関わりと一体です。人間の尊厳、つまり、私たち一人一人の存在価値が問題になる時には、実は命の源である神をどう理解し、神とどう関わるのかが問題になっています。存在を肯定し、命を祝福する声を、どこから私たちは聞くのでしょうか。このような声を聴けなければ、私たちは自分の人生を肯定的に受け止め、人間らしく生きるということが難しくなってしまうと感じています。

【続く】

二〇二二年一〇月三一日、Ｚｏｏｍにて実施